

宮城・一本柳遺跡

いっぽんやな

実施した。

- 1 所在地 宮城県遠田郡小牛町字新一本柳・一本柳・塩釜
- 2 調査期間 一九九八年（平10）六月～一二月
- 3 発掘機関 宮城県教育委員会

- 4 調査担当者 伊藤裕・菅原弘樹・岩見和泰

- 5 遺跡の種類 集落跡・屋敷跡

- 6 遺跡の年代 奈良・平安時代、中世、近世

- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



一本柳遺跡は、県北中央部の大崎低地東縁部に位置し、鳴瀬川左岸に形成された標高約100mの自然堤防上に立地する。奈良・平安時代、中世、近世の複合遺跡で、東西500m以上南北100m程の広がりをもつ。

調査は鳴瀬川中流域堰閑連工事に伴うもので、一九九五年度以降継続して行なつており、今年度までに約一七〇〇〇m²の事前調査を

○～100mほどの方形の屋敷が、川沿いのほぼ同じ場所に重複していくつも営まれていることが明らかになった。屋敷地内からは、掘立柱建物や井戸約二七〇基をはじめとする多数の遺構が発見されており、少なくとも鎌倉時代後期から戦国時代頃まで存続していたことがわかつてきた。

今回報告する木簡は、遺跡のほぼ中央部で、東西約100m南北100m以上の屋敷を囲む溝（SD五八九）から出土した。溝の規模は上幅三～四m深さ一・五m程で、年代は一三世紀中葉～一四世紀中葉頃と推測される。

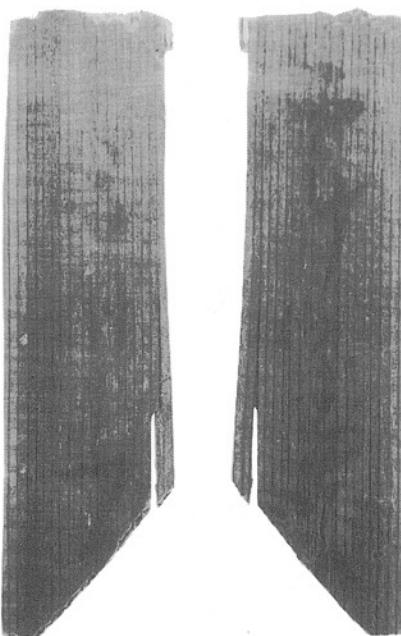
共伴する遺物には、かわらけ・国産陶器（常滑・渥美・古瀬戸）・中国陶磁器（青磁・白磁・青白磁・黄釉・铁釉）・漆器・石鍋・茶臼などがある。とりわけ青白磁梅瓶・白磁四耳壺・黄釉盤といった希少な中国陶磁器や茶道具（鉄釉茶入れ・茶臼）の存在は、屋敷居住者の階層の高さを示唆している。

- 8 木簡の釈文・内容

(1) 「一斗□□□□

下半は切断されている。「二斗」という語句と、上端から1cm程
下に紐をかけた痕跡があることから、荷札かと思われる。

(1~7 菅原弘樹、8 吉野 武)



卷頭言——書は言を尽くさず、言は意を尽くさず——
佐藤宗諱

木 簡 研 究 第一七号

一九九四年出土の木簡

概要 平城宮跡 平城京跡 左京三条一坊十二坪 平城京跡 平城京跡
左京七条一坊十六坪 東大寺 奈良女子大学構内遺跡 高安城関連遺
跡 藤原宮跡 藤原京跡 左京七条一坊東南坪 藤原京跡 左京十一條三
坊 長岡京跡(1) 長岡京跡(2) 長岡京跡(3) 平安京跡 左京四条一坊一
町 平安京跡 左京八条三坊十四町 平安京跡 右京八条二坊二町 慈照
寺境内 寺坊山遺跡群 大坂城跡 裕狭遺跡 見藏岡遺跡 有年原
田中遺跡 梶子北遺跡 曲金北遺跡 伊興遺跡 錦糸町駅北口遺跡
宮町遺跡 前橋城遺跡 荒田目条里遺跡 矢玉遺跡 山王遺跡 大坪
遺跡 中尊寺境内金剛院 花立II遺跡 志羅山遺跡 福井城跡 大友
西遺跡 石名田木舟遺跡(1) 石名田木舟遺跡(2) 北高木遺跡 水橋荒
町遺跡 山木戸遺跡 上郷遺跡 陰田小大田遺跡 米子城跡 七遺跡
三田谷I遺跡 吉川元春館跡 田村遺跡群 姉川城跡 中園遺跡Ⅲ区
一九七七年以前出土の木簡 (一七)

平城京跡 左京二条二坊六坪

刻齒簡牘初探—漢簡形態論のために—

楓山 明

新潟特別研究集会の記録

国史跡指定答申なった八幡林官衙遺跡・小林昌一、八幡林遺跡の時代
の変遷・田中靖、古代越後平野の環境・交通・官衙・坂井秀弥、封緘木
簡考・佐藤信、八幡林遺跡木簡と地方官衙論・平川南、討論のまとめ
書評 鬼頭清明著『古代木簡の基礎的研究』 今津勝紀
彙報

頒価 五五〇〇円 送料六〇〇円